

## 1 2 評価

「アクティブラーニング」を導入しはじめた学校は多いが、どう評価をするのかという問題については全国的にみてもまだ研究は進んでいない。どれだけうまく「アクティブラーニング」を行っても、その先に生徒をどう育てていくのか、評価していくのかといったことが見通せていないことから、不安を感じるなどといった指摘を高校現場ではよく耳にする。こうした意味で、評価は実践の方向性を決める羅針盤のようなものといえる。だからこそ、「アクティブラーニング」の先にある出口である評価方法についても、実践と並行して研究を進めていく必要がある。

### 1) I C E 評価とは

評価の方法はこれまでに、ポートフォリオ評価、パフォーマンス、ルーブリック評価などが研究されていた。今回本校では、数多くの評価の中でも特に I C E 評価に注目した。カナダで開発された教育評価システム I C E モデルは日本では土持ゲーリー氏らによって紹介されたが、広島県ではいち早くすべての高校で I C E モデルに基づいた教育活動を実践しており、特に県立安芸高等学校の取組が注目されている。

I C E とは Idea (アイデア)、Connections (つながり)、Extensions (応用) の頭文字をつないで作られた言葉である。この I C E 評価は分野を問わず、いつでもどこでもの分野でも使用可能であり、今後の教育において最も有効な手段として期待されている。学習者がどれだけ前進したかを学習前と学習後で比較し評価できる点が優れた点である。

従来、評価については、規準 (Criterion) と基準 (Standard) の両方が必要であると研究されてきた。学習の観点とは何か、またその学習の到達段階の両方が求められてきた。それをわかりやすく表にまとめたものを「ルーブリック」とよぶ。このルーブリックについては全国の大学や専門学校や小中高等学校に導入されつつあるが、その学習者の到達段階をたどる上で、指導者や学習者は何をステップにすればよいかという問題にぶつかるとなる。その手がかりとなるのが 3 つのステップ I C E なのである。

I (アイデア) は学習を形作る上で必要なものである。語彙や定義、基礎的な事実関係、簡単な計算力など初歩的な技能を意味する。教科書にはこういった知識が豊富にあるが、単元ごとに羅列している状況である。そこで学習した内容と既に学習した知識との間に関連づけることが必要となる。これが C (つながり) である。さらにこうした取組により一層深い学びを保証する必要がある。E (応用) とは学びの集大成であり、意識的に知識と知識を関連づけようとしたり、自分の過去の経験とつなげようとしなくてもよくなったときに起こるものである。「積み木」を例にしてかみ砕いて説明をする。

図にあるように I レベルでは学習者がいろいろな積み木 (知識) をまず手に入れることを目標とする段階である。この手の学習方法は従来の教育でなされている。いろいろな材質、堅さ、色、形状などの積み木をとにかく数多く、自分のものにする教育 (いわゆる詰め込み教育) が盛んであったが、PISA などの調査結果によって見直しの必要が出てきた。I C E 評価ではここで満足するのではなく、次のステップが用意されている。C レベルでは、自分の持っている積み木をどう組み合わせるかなど、知識と知識をつなぐという

段階である。そしてEレベルでは、様々な積み木から目標に達成するための具体的な道具を作成する作業である。移動する手段を表現したいと思えば、既存の積み木から車を作り上げればよい。こうした活動をそれぞれの3つのレベルで到達した状態を表す動詞をキー

にすることで、授業者は、生徒をどこまで指導したいか、また到達できたのかなどを確認できる。

ICE評価はコンパスやものさしの役割を果たすのだ。

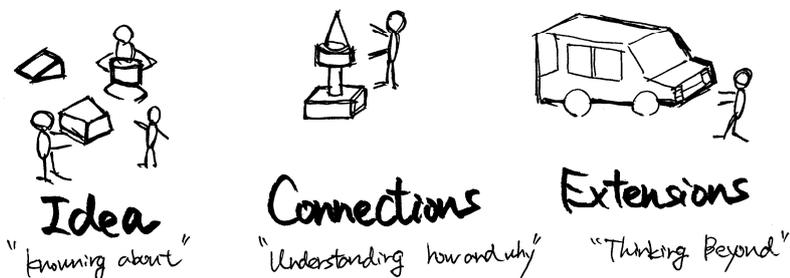


図 積み木によるICEモデル

## 2) ICE導入校の実例

今回のICEの手法と理念をどのように実践に結びつけているのかを知るために広島県立安芸高等学校訪問をした。わずか半日の訪問であったが、その活動の中心となった柘磨校長先生の博学と熱意・独創性に圧倒されると同時に、実践が本格的で全校態勢の取組が成果をあげていることを様々な資料から伺い知ることができた。紙面の関係ですべてを網羅することはできないが、特に本校として参考にしたいポイントを2点紹介する。

### a) 発問と自己内対話

アクティブラーニングでは教師側が生徒を動かさなければならないという意識が強くなり、逆に思考の機会を奪いがちである。安芸高校では、生徒達が沈黙している時間は一生懸命に考えていると捉え、その姿を大切にしているという。思考は、発問によって生じ、この発問の質によって大きく異なる。また、教師だけが発問をするのではなく、自分の中で問いをたてられるような自己内対話をするすることで、学びをより一層深めることができる。資料から判断すると、こうした問いの分析が徹底的になされていることがわかる。

### b) 本質目標 (Super Extensions)

安芸高校では、本質目標 (Super Extensions) を定義した上でICE評価を作成している。ICE評価は評価レベルを順にIレベルからC・Eへと引き上げて考えていきがちであるが、安芸高校では逆にEの先にある本質目標から考える手法をとっている。したがって、教科・科目の最大到達目標を定めることが授業を組み立てる上でキーとなる。これを設定することで、指導の方向性にブレを生じないようにすることができるという。

## 3) まとめ

AL推進委員会ではこの実践・研究の出発点になった溝上慎一氏の定義に実践上の物足りなさを感じて議論をしたが、それはALが何を指すのかということが定義には含まれていないということであった。今回の学校訪問でAL型授業と評価は一体であるということに改めて気づかされた。来年度は、教師側が学習者のレベルを整理することで、生徒にどのような力をつけたいか、どのレベルまで到達したのかなど、生徒の学習の過程を理解しつつ、それに見合った教材研究や問題作成に取り組んでいきたい。(文責：渡邊強)